

加藤博士十年祭の記

加藤玄智博士が想い出の御殿場東山の学勞窟に於て宗教学に打込まれた生涯を終えられたのが昭和四十年五月八日——それから早くも十年の歳月を閲した。月日の経つのは早いという実感をひしひしと覚える。

墓参を予定した五月八日は生憎交通ストに遭遇した為、志のある多くの方々が参加不可能となったが、明治神宮の伊達宮司（本会々長）高沢権宮司は自動車で、酒井堯、岡田米夫、梅田義彦、柳田喜代子の各氏並びに事務局の鎌田、千葉の兩名は運よく動いていた小田急、西武玉川線を利用して折しも青嵐にまつまれた多摩墓地（十一区一種三側）の先生の墓前に交々額づいてから、近くの墓石店に休憩して先生の想い出にふけて辞去した。

尚、富士文庫報（石川軍治氏編集）によると五月十一日には博士令孫清昭氏兄妹、清昭夫人、末光希仙師、長田喬氏、青少

年会館管理人等は、御殿場市東山の市立青年会館敷地内にある加藤博士頌徳碑に十年祭記念の参拝を行った由である。

*

五月十七日の記念講演会については伊達会長の「加藤玄智博士の学恩を憶う」の中に触れておられるが、当日は安津教授その他の多くの方々の格別の御尽力によって国学院大学大講堂に加藤先生の御写真を奉掲し、先生が生前お好きだったお菓子や果物をお供えして御霊をお慰め申し上げ、開会に先立って伊達会長の先導によって一同霊前拝礼をなし、先生の学徳をお偲び申し上げた。続いての記念講演会は会長の挨拶、高山副会長の経過報告等いずれも真心こもった想い出が述べられ、続いて本書にも収録されているが、安津教授の「加藤玄智博士の生祠研究について」、小林健三氏の「加藤博士の学績について」の熱演に心打たれて会を閉じた。その後国大応接室に於てご令孫を中心として先生を偲ぶ一ときを持って意義深い会合を終った。

尚、当日東京は勿論関東各県、又遠く島根、鳥取、和歌山、仙台等よりも学恩につながる多くの方々の方々の参会を得たことも感銘深いことであった。

（事務局 鎌田記）